甲状腺外科草子 128
哲人宰相：大平正芳余話②

杉野　圭三

大蔵省時代

大平は大学卒業後(1936 年)大蔵省に入省、翌年に鈴木志げ子と結婚。日本経済新聞に妻への感謝の言葉を寄稿している。

大平一家

「私はまず、妻に一貫して私と子供に対する真剣な献身を感ずる。妻は私の健康のことを昼夜わかたず心配してくれる。健康といえば肉体的な健康にだれよりも敏感であるが、より以上に私の精神的な健康に敏感である。このことこそは、何といっても女の美徳である（一部略)」

大蔵省での仕事は順風満帆とは行かず、1939 年に満州の張家口への出張を命ぜられる。

大蔵省入省の同期（右前２人目）

興亜院蒙疆（張家口）連絡部課長時代（中央）

この地で伊東正義（農林省)、大来佐武郎（逓信省)、佐々木義武（商工省）らと交流を深めた（後にそれぞれ官房長官、外相、通産相として入閣)。後年、大平は友人でもある伊東正義に「他人から理解され、その存在を認められるということは、人間にとって何よりの生き甲斐だ」と語っている。

哲学者大平正芳と言われる所以は言動やその著作集からうかがえる。

横浜税務署長となった大平は 1938(昭和 13)年、新年拝賀式で署員に訓示している。

「行政には楕円形のように二つの中心があって、その二つの中心が均衡を保ちつつ緊張した関係にある場合に、その行政は立派な行政と言える。中略。統制経済も統制が一つの中心、他の中心は自由というもので、統制と自由とが緊張した均衡関係に在る場合に、はじめて統制経済はうまく行くのであって、その何れに傾いてもいけない」

「**楕円の哲学**」と呼ばれる大平の思想だが、あの口調でこのスピーチを聞いた人々の反応を知りたいものである。

京都帝国大学の哲学者**田辺元**（はじめ）教授の講演録は大平に大きな影響を与え、

「私はこの本を読んで深い感銘を覚えたばかりでなく、その後における私のものの見方や考え方に大きい指針が与えられたものであります、以下略」と述べている。

また、大平の「**永遠の今**」というテーゼ（命題）を簡略して紹介する。

「時間は直線的に進行せず、過去の引力と未来の引力（互いに逆方向に働く）の均衡点に現在はある。その現在は正に「**永遠の今**」であって、時間は則ち「**永遠の現在**」ということになる。生涯の節々にその支点となっている「永遠の今」、その「永遠の今」に恵まれた決意によって身を処し、その決意によって織りなしてきた自分の人生絵巻は、自分にとっては唯一のものであって無二のものである。貴いものであり、繰り返しの効かない取替のできないものである。悔いがあっていい筈のものではなかろう」

若輩者と侮ることのできない思想である。

戦後、昭和 20 年、津島壽一大蔵大臣の秘書官に就任、翌年大蔵省給与局第三課長に就任。

当時の**今井一男**局長は大平を「自慢しない、愚痴をこぼさない、他人の悪口を言わない、という点で人徳があり、仕事は独断専行だが結果は良かった」と評している。

（　一甲状腺外科医の徒然なる随想　）

2025 年 2 月 6 日